

令和7年度第2回講演会について

市町水道職員等への水道知識の普及を目的とし、講演会を次のとおり実施しました。

- 1 日 時 令和7年8月1日（金）午後1時00分～
- 2 場 所 アイリス愛知 2階「コスモス会議室」
- 3 講 師 神戸大学 大学院 工学研究科
教授 鋤田 泰子 氏
- 4 演 題 「水道の地震対策30年とこれからの整備」
- 5 内 容 ・兵庫県南部地震から30年
・【学術】地震工学の30年
・【実務】水道の地震対策30年
・最近の管路漏水や水管橋崩落を踏まえて
・これからの水道施設整備に向けて
- 6 聴講者 104名（愛知県、日本水道協会愛知県支部会員ほか）
- 7 開催状況



理事長挨拶



講師：鋤田 泰子氏



講演状況



講演状況

水道緑地部 第2回講演会（講演内容要約）

日時：令和7年8月1日（金）13：00～

場所：アイリス愛知

講師：神戸大学大学院工学研究科 教授 鋤田 泰子 氏

演題：水道の地震対策30年とこれからの整備

兵庫県南部地震から30年を振り返り、地震工学の学術的進展と水道事業の実務的対応の両面から分析した水道インフラの地震対策の進展と今後の課題について講演。

- 兵庫県南部地震における神戸市での水道配水管（主にDCIP）の被害件数は1,757件で、復旧に10週間を要した。
- 水道の被害は他のインフラ施設と比較して復旧費用は少ないものの、復旧に時間がかかる特性を指摘。
- また、地震火災における消火栓の機能不全問題や、病院への給水確保の重要性についても言及。
- この30年間で地震工学分野では「レベル1・レベル2」の2段階設計法や性能規定型設計法の導入など設計体系が変革。
- 一方で、水道事業における全国的な基幹管路の耐震適合率は40%程度にとどまり、年増加は1%未満かつ停滞ぎみで、基幹管路の耐震管率としては現状30%に満たない現状を指摘。
- 被災経験のある自治体は耐震化を積極的に進めている一方で、被災経験のない地域では対策が遅れている実態。
- 最近の水管橋事故や能登半島地震の事例も取り上げ、送水管の重要性や復旧の難しさについて解説。
- 今後の整備に向けては、リスク開示と社会の受容の育成が必要。
- これからの地震対策と施設整備は、管路更新における耐震化の標準化、光ファイバセンシングを活用したひずみ計測による水道施設への適切な作用外力の評価、技術者の育成と水道施設への投資の必要性などを強調。